
童話を聞かせながら自分も子育てを学ぶシリーズ

大塚紗也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話を聞かせながら自分も子育てを学ぶシリーズ

【Nコード】

N2927R

【作者名】

大塚紗也

【あらすじ】

おうちに住んでいる妖精が、子供に片付けをさせようと試みます。さて、その結果は？

「おうちの妖精」

「おうちの妖精」

「ママ」。宿題のプリント知らない？」

「知らないわよ。だらしないから物がなくなるんですよ。」

舞ちゃんは、小学2年生の女の子。

いつものように物を無くし、困っているようです。

舞ちゃんのおうちは小さなおうち。

キッチンとリビングしかありません。

その為、リビングがみんなのお部屋になっています。

舞ちゃんの勉強道具は、テレビの左側にある棚に片付ける約束。

でも見てください。

部屋いっぱいに散らかされた教科書やおもちや。

いくらママが片付けるように言っても、棚の中に放り込むか、袋にドッサリ入れるだけなのです。

「もう、ママがどつかにやったんでしょ？」

だって舞、昨日学校に行く前にここに置いたもん。」

舞ちゃんが指差したのは床でした。

「ああ、昨日掃除した時に舞の棚に全部まとめて入れたわよ。探してみなさい。」

舞ちゃんは、文句を言いながら棚を探しています。

それを、おうちの妖精パピルちゃんが、こっそり見ていました。

どこのお家にも【お家の妖精】が住んでいます。

舞ちゃんのおうちには、パピルちゃんが暮らしていました。

パピルちゃんはいつも思ってます。

「舞ちゃん、お片付けいつもやってくれない。私のおうちなのに汚いじゃない!」

ママがいくら片付けても、すぐに汚す舞ちゃんを見て、怒っていました。

ママもこの頃、舞ちゃんの物は片付けるのを止め、自分でやるように言っています。

舞ちゃんの棚はぐちゃくちゃ。

「よし、舞ちゃんを懲らしめてやる。」

実はパピルちゃん、舞ちゃんの宿題プリントを魔法で消してしまっただです。

「ねえ。本当に見つからないよ。明日持って行かなきゃいけないのに、どうするの!」

舞ちゃんは、自分がだらしがなくなっていた事を棚に上げ、ママに怒ります。

「自分がだらしがないんだから、人のせいにするんじゃないの！だったら、ちゃんと片付けしなさい。片付ければ出てくるわよ。」

ママも舞ちゃんに怒り返しました。

それを見たパピルちゃんは、クスクス笑っています。

「ちゃんと片付けしないと、私許さないんだから。」

パピルちゃんは、舞ちゃんをずっと見ています。

舞ちゃんは、ブツブツ言いながら片づけを始めました。

「ママ。やっぱりないよ。どうすればいいの？」

今度は、舞ちゃんの泣き虫攻撃。

まだ、ちよつとしか片付けていないのに、ママに助けを求めます。

見かねたママは言いました。

「じゃあ、ちゃんと片付けしたら、先生にもう一度プリントもらえるよう、連絡帳に書いてあげるから、片付けするのよ。」

そう聞いた舞ちゃんは、ママに連絡帳を渡しました。

そして、やっと本気で片付けを始める気持ちになったようです。

「あーそうだね。片付けながらこう言ってみなさい。」

ママは舞ちゃんにおまじないを教えます。

『プリントさん、出ておいで。もう、だらしがなくしないから。こめんねプリントさん。』

「物がなくなつた時は、物さんの名前を呼びながら探すのよ。そうすると、物さんが答えてくれて見つかるから。」

それを聞き、舞ちゃんはおまじないを、必死で唱えながら、ぐちゃぐちゃ棚をひっくり返しました。
エンピツ、折り紙、ブロック、おもちゃのレール、すべて床に散らばります。

中にはゴミまで入っていました。

「うわあ、汚い。舞ちゃん、ちゃんと片付け出来るのかしら？」

パピルちゃんは、舞ちゃんの肩に乗り棚の中を覗きます。

いらぬ物はゴミ箱へ。

舞ちゃんは、大きな物から順番に、棚の中へ入れていきます。

やっとの事で全部キレイになりました。

「ママ、片付けたよ。でも、プリント見つからなかった。」

舞ちゃんは落ち込んでいます。

「しょうがないでしょ？見つからないなら。」

もう連絡帳に書いてあげたから、今日の宿題しちやいなさい。」

そう言われ、舞ちゃんはしぶしぶ今日の宿題を始めます。

「キレイになったし、そろそろ許してあげようかな。」

パピルちゃんも、そろそろ舞ちゃんを許してあげる事にしました。

魔法でプリントを舞ちゃんに返します。

「ママ！プリントあった。さっき、見たのに今日の宿題の中に入ってた。何でだろう。」

舞ちゃんは目を輝かせながら叫びました。

「そうね。プリントさんもだらしがなくされて、怒っちゃたのね。だから隠れてたんじゃないかしら？」

パピルちゃんは、笑っています。

「私の魔法なのに。うふっ。」

舞ちゃんは首をかしげながら言いました。

「おかしいな、何度もここ見たのに。」

もし、あなたのおうちで物がなくなったら、それは【おうちの妖精】さんのイタズラです。

心当たりはないかな？

大切な物が無くならないように、お家はいつもキレイにしておこう
ね♪

「はじめて作るぞ朝ごはん」

「はじめて作るぞ朝ごはん」

今日は土曜日。

幼稚園も休み。

パパもママもお休み。

朝8時なのにパパもママも寝ています。

圭太君は、お腹が空いてたまりません。

「ねえママ。お腹すいた。ご飯作ってよ。」

圭太君は、ママを揺すりながら言います。

「うん。今日はママもお休みなの。自分で作って食べてよ。」

ママは、圭太君に背中を向けながら言いました。

圭太君は、まだご飯を作った事ありません。

「ママ。ママ。」

ママを一生懸命揺らしますが、ママは起き上がろうとしてくれない。

一緒に寝ているパパも全然起きてくれません。

やっと、揺らし攻撃に負けたママが、寝返りをつつて圭太君を見ました。

「パンが置いてあるカゴに、コーンフレークもあるから、好きなの食べてよ。」

圭太君の目が輝きます。

「いいの！自分で作っていい？」

「うん。自分の分だけでいいからお願いね。」

ママがニッコリして言いました。

それを聞いた圭太君は、急いでキッチンへ。

パンのカゴは、電子レンジの上にあります。

圭太君専用のイスをそこまで運び、カゴに手を伸ばしました。

「よいしょっと。」

持ち上げたカゴには、あんぱん、食パン、レーズンパンに、コーンフレーク。

たくさん入っていたので、圭太君には重すぎます。

あっ、あぶない。

圭太君はカゴを落としてしまいました。

「あゝあ。ママがやらないからだよ。」

圭太君はブツブツと文句を言いながら、落ちたカゴの中に、パンとコーンフレークを戻しました。

大きな音がしたのに、パパもママも知らんぷり。

圭太君は、イスをキッチンに移動させます。

パンのカゴもキッチンに置いて、パンを眺めます。

「パンは、出来ているから面白くないな。

よし！コーンフレークにするぞ！」

独り言を言いながら、コーンフレークを手に取りました。

いつもママがやっているように、キッチンの引き出しからハサミを出します。

ついでにスプーンも出しました。

圭太君は、コーンフレークの袋にハサミを入れます。

「ふふん！僕、ハサミは得意なんだよな。」

とっても上手に切れました。

その袋をカゴに寄りかからせ、今度は牛乳を取りに冷蔵庫へ移動します。

いつもコップに、自分で入れる牛乳。

冷蔵庫を開けると右側にあります。

「おっ、軽い。足りるかな？」

牛乳を持ち、少し振ってみました。

あゝあぶない。

「あゝあ。こぼれちゃった。まあいいか。」

床には、牛乳のしずくが少し飛び散っています。

圭太君は気にせず続けました。

牛乳はコーンフレークの傍へ置きます。

今度はお皿の用意。

後ろの棚、一番下が圭太君のお皿置き場。

いつも自分でしまうので、よくわかっています。

扉を開けて、青くて丸いお皿を出しました。

あとは作るだけ。

お皿にコーンフレーク投入。

あゝあぶない。

「あゝあ。いっぱいこぼれちゃったじゃないか。何で三才なのにこんな事しなきゃいけないんだよ。」

またブツブツと文句を言います。

キッチンには、床いっぱいコーンフレークで散らばっています。

とりあえず、お皿にコーンフレークを入れる事が出来ました。
次は牛乳。

少ししか入っていないと思っていた圭太君。

勢いよく牛乳パックを逆さにしました。

あゝあぶない。

「あゝあ。いっぱいだっただ。」

牛乳もキッチンに飛び散らせてしまいました。
おまけに、お皿いっぱい牛乳が入っています。
圭太君はお皿に口を付け、少し飲みます。

“ジュールジュール”

「こんなもんかな。」

圭太君、キョロキョロし始めます。

キッチンには乾いたフキンしかありません。
仕方なく、フキンを自分で洗う事にしました。

「よっこいしょ。」

水道に手を伸ばし、フキンを濡らします。

固く絞ったハズなのに、なんだかべちょべちょ。

「よし、テーブル拭くぞ。」

キッチンの、目の前にあるテーブルを拭きに行きました。
いつもママがやっている事。

圭太君はちゃんと見ています。

「なんかテーブル、びちょびちょだな。まあいいか。」

フキンをテーブルに置いたまま、今度は出来たコーンフレークを取りに行きます。

“バリッ、バリッ”

あらあら、落ちてるコーンフレークを踏んでしまいました。

「もう！なんだよ。」

足の裏をはたき、今度はよけながらお皿の所まで進みます。やっとたどり着き、お皿とスプーンを、手に取りました。

今度は踏まないようにテーブルに戻ります。

あっ、あぶない。

お皿の中から牛乳が、ビチャビチャと床へ飛び散ります。

「あゝあ。こぼしちゃったじゃんか。うゝん。まあいいや。」

圭太君はやっとの事で、テーブルにたどり着き、コーンフレークを食べる事が出来ました。

食べ終わった頃、ママがやっと起きてきます。

「何これ！」

どうやら、床に散らばったコーンフレークや牛乳にビックリした様子。

「もう、食べ終わったよ。すごいでしょ！」

圭太君は、全然ママの様子に気が付かず、笑っています。そんな顔を見てママもニッコリ。

「うん。すごいね。でも、この床はどうしたかな？」

「ママがいけないんだよ。僕はまだ子供なんだから、こぼして当たり前でしょ。」

そう言われてママは苦笑い。

「そうか。ごめんね。でも、立派な大人になる為に、今度は片付けの練習しようか。」

「うん！僕、今度からお休みの日、自分でご飯作るよ。ママもお休みだもんね。」

「そうね。助かるわ。じゃあ、少しずつ、ママと一緒に練習しようね。」

ママは優しく圭太君の頭をなでました。

圭太君は、お皿を流しに運びます。

“バリッ、バリッ”

コーンフレークの音が響きます。

今度は片付け開始です。

お手伝いを覚えさせるには、幼少期に当たり前のようにさせるのがベストです。

何でも出来るようになる、小学生まで待っていてはいけません。小学生くらいになると知恵がつきます。

母親としては、自分がやった方が早いと思うでしょう。

けれど、幼少期の子供は何でもやりたがる。

その時にやらせてあげる事が大切なのです。

失敗しても怒ってはいけません。

お手伝いを続けさせる事で次第に手際も良くなります。

ここが、大きくなってお手伝いをする子供と、しない子供の違いになるのです。

「お金はどうしてたまる？」

「お金はどうしてたまる？」

「萌、お風呂湧いたから、マリアちゃんと一緒にお風呂入っちゃいなさい。」

「マリアちゃん、こっちだよ。」

今日はお泊り会です。

萌ちゃんのおうちには、マリアちゃんが泊りに来ていました。

ご飯も食べ終わり、今度はお風呂の時間。

お風呂の支度をして、二人は一緒に入ります。

“ジャバジャバ”

お湯を流す音が聞こえました。

「萌ちゃん、シャワー使っていい？」

マリアちゃんのおうちでは、いつもシャワーを使っている様子。

「えー。お水もつたいないからダメだよ。」

「なんで？いいじゃん。萌ちゃんのママに聞く。」

そう言って、お風呂の扉を開けました。

二人の会話を聞いていた、萌ちゃんのママがすぐ傍に來ています。

「シャワー使っていい？」

「ごめんね。うちではシャワー禁止なの。湯ぶねのお湯を使ってくれる？」

萌ちゃんママがそういうと、マリアちゃんは素直にいう事を聞きませんでした。

今度はシャンプーを始めた様子。

「あゝ、マリアちゃん。そんなにいっぱい使ったらダメだよ。見てて、このくらいだよ。」

「えゝ何で？ケチだね。」

そんな会話が飛び交っています。

やっと洗い終わり、二人は湯船に入った様子。

「ねえ、萌ちゃんの家はなんでシャワー使っちゃいけないの？」

「それはね、シャワーだと流したままのお水が、もったいないからだよ。」

「それはわかるけど、めんどくさいじゃん。」

「じゃあさ、面倒だからお水いっぱい使ったら、その分お金が無くなるの知ってる？」

「えゝ、なくなるのはお水でしょ？」

「もちろん、お水もなくなるけど、そのお水はお金で買ってるんだよ。だから、無駄にしなければ、その分お金を使わなくて済むから、ご飯とかお洋服とかに使えるんだよ。」

二人は、お水について話しています。

萌ちゃんは、小さなころからママに教えてもらっていました。

お水だけでなく、エンピツ、紙、ご飯、トイレトペーパー、何でも無駄にしてはいけない事。

けれど、マリアちゃんのおうちでは違うようです。

「うちはね、みんなシャワー使ってるし、エンピツだって小さくなったらすぐ捨てるよ。」

だって書きずらいじゃん。トイレトペーパーだって、たまに使いすぎて詰まる事あるけど、全然そんなの気にしない。」

二人の意見は違うようです。

その話を聞いていたママが、お風呂の扉を開け、話に参加してきました。

「マリアちゃんのおうちはお金持ちなのかもね。うちはね、お金持ちではないから、少しでも“節約”してお金を貯めたいのよ。それにね、日本できれいなお水を飲むのは当たり前だけど、他の国では汚いお水だったり、飲めなかったりするの。だから、みんなが少しずつ節約したら、世の中の人の為にもなるのよ。」

「ふん。そつか、ケチつてわけじゃないんだね。」

そう言つて、マリアちゃんはニツコリとしました。

二人ともお風呂から上がり、今度は寝る準備。

萌ちゃんのおうちでは、九時に消灯です。

「え、萌ちゃんち、九時に寝るの？ママまで？うちはもっと遅いよ。それに、マリアが寝ても、パパとママは寝ないもん。」

萌ちゃんママは、布団を敷き始めました。それを見て、マリアちゃんはまたビツクリ。

マリアちゃんのおうちはベット。

旅行に来たみたいで楽しいと言っています。

九時になり、みんなと一緒に布団に入ります。

「もうすこし萌が大きくなったらベットにしようと思つけど、今はお布団がいいのよ。」

萌ちゃんママは、萌ちゃんに抱きつきながら「くつつくと温かい」と笑っています。

「それにね、みんなで一緒に寝ると無駄な電気も使わなくていいから、お金も貯められるのよ。」

「でも、ママたまに夜更かしするじゃん。」

萌ちゃんがさういうと、ママは用事がある時は仕方ないけど、出来

るだけムダを無くしたいから頑張っていると言いました。

マリアちゃんには初めての事で、驚く事がたくさんありました。面倒だからいやだなと思った事もあったけど、舞ちゃんとママが、楽しそうにくつついたり、お布団の中で“おしくらまんじゅう”を始めたのを見て、なんだかうらやましくなりました。

『明日、おうちに帰ったら、マリアもママと節約ごっこを始めよう。』

そう思って、眠りについたのでした。

「買ってなんて言えないよ」

「買ってなんて言えないよ」

勇樹君は今、ママと一緒にスーパーに来ています。

「ママ、これ買ってえ。」

勇樹君は、大好きなお菓子を手に取り、ママに言いました。

「ダメ。余計なお菓子を買うお金は、持っていないの。」

もちろん、ママは買ってくれません。

でも勇樹君は諦めない。

「買って。買って。買って。」

お店の人たちが、それを見て笑っています。

「いい？勇樹、欲しいものがあつたら、自分でお財布を持ってきたさい。ママは、いつも『買ってあげない』って言ってるでしょ。」

そうです。

勇樹君のおうちでは、買い物に行っても、ママが欲しいものしか買いません。

勇樹君には、お年玉でもらったお金があります。

自分で欲しいものがあれば、自分のお金で買う約束なのです。

「だって、お財布忘れちゃったんだもん。」

勇樹君は、口を尖らせながら言います。

「スーパーに行くのが、分かっていたのだから、お財布忘れる勇樹が悪いでしょ。今日は我慢して、今度買いなさい。」
ママは冷たく言い放ちます。

「ちえっ。ママのケチ。」

とうとう勇樹君は諦めた様子。

「忘れる勇樹が悪い。それにね、そのお菓子じゃ、いっぱいチョコレート食べられないわよ。おまけが入っているお菓子を買って、チョコレートを少ししか食べられないのと、同じお金で、いっぱいチョコレート食べるの、どっちがいいと思う？」

勇樹君は少し考えます。

「いっぱい食べたいけど、おまけも欲しい。」

「じゃあ、同じお菓子いっぱい買うの？そうしたら、すぐにお金だつて無くなって、次のお年玉まで買えない物でなくなるわよ。」
さらに勇樹君は考えます。

「じゃあ、今度買い物に来る時は、ひとつだけ買う。お菓子がいっぱい食べたい時は、違うのにする。」

「よし！ちゃんと考えているわね。何でも、全部自分の思う通りに出来ないのよ。我慢するっていう事も覚えてね。」

勇樹君は、ママにお菓子を買ってもらった事も、諦められ、自分のお財布を持つことで、お金の大切さもわかったようです。

その様子を、見ていたおばさんが言いました。

「偉いわね。」

勇樹君は得意気です。

ママもニッコリ笑っています。

「よし、じゃあ我慢出来たからこれあげる。」

ママは、ポケットからあめ玉を出し勇樹君に渡します。

勇樹君、お菓子は買えなかったけど、ママからのご褒美で大喜びでした。

「ママの魔法で二人とも泣き止む」

「ママの魔法で二人とも泣き止む」

葉月ちゃんは3歳。

でもお姉ちゃんです。

柚木ちゃんという妹が、一週間前からおうちにやってきました。

ママが病院から退院して、赤ちゃんを連れて戻ってきたのです。

「おぎゃーおぎゃー」。

「かわいいね。もう葉月はお姉ちゃんだから、柚木ちゃんに優しくしてあげてね。」

ママは、赤ちゃんのオムツを変えながら、葉月ちゃんに言います。

「うん。かわいい。」

「おぎゃーおぎゃー」

オムツを変えても、赤ちゃんは泣き止みません。

「あら、さっきおっぱい飲んだのに、また飲みたいのかしら。」

今度は、お乳を与えます。

赤ちゃんは、お乳を吸い始め泣き止みます。

「お腹が空いてたんだね。」

「どうかな？おっぱいが好きなだけかもしれないわよ。」

葉月ちゃんは、不思議そうに赤ちゃんを眺めています。

“ピンポン、ピンポン”

その時、おうちのチャイムが鳴りました。

お婆ちゃんがやって来たのです。

「葉月、お婆ちゃんだからドア開けて。」

ママに頼まれ、葉月ちゃんがお婆ちゃんを招き入れます。

「あら、おっぱい中だったの？そう言えば、葉月の時、お乳が出ないって悩んでたじゃない？」

「ああ、最初の子だからね。雑誌とか読みすぎて粉ミルクとかあげてたの。病院にもすすめられたりしたけど、お乳がどれだけ出てるかなんて、わからないじゃない？だから母乳だけにしてみたのよ。」

ママは、そう言うとお赤ちゃん用の体重計を指差し言いました。

「あれで、育ってるかわかるしね。」

そう話していると、赤ちゃんがお乳から口を離しました。

赤ちゃんをお婆ちゃんに渡します。

「おぎゃー、おぎゃー。」

「あらあら、婆ちゃん嫌われちゃったわね。葉月の際はこんな事なかったのに。」

お婆ちゃんは残念そう。

ママは、笑いながら赤ちゃんを受け取り、ベットへ移動させました。赤ちゃんは、ベットに置かれたとたん、また泣き出します。

お母さんはまた、赤ちゃんを抱っこしました。

「あら、抱き癖付けちゃだめよ。我がままで世話が大変になるわよ。」

「そんな事ないわよ。こうして抱っこさせてくれるのも赤ちゃんの時だけなんだから、いっぱい抱っこするの。葉月の時も、雑誌に書いてあつて、抱っこ我慢しようか迷ったけど、いつの間にか抱っこから卒業して、こうして立派なお姉ちゃんになったわよ。」

お婆ちゃんは、怒ったような顔をしましたが、ママは気にしません。ママにはママの育て方があるのです。

ママが抱っこして、赤ちゃんは安心したように眠ります。

「また寝てるね。」

「赤ちゃんはたくさん寝るのが仕事なのよ。」

ママは赤ちゃんを抱っこしたままソファに座っています。

「ベットに置いてきなさいよ。」

「いいのこれで。柚木は三十分しないと熟睡しないから、すぐに置くと泣くのよ。」

お婆ちゃんより、ママの方が赤ちゃんの事を良く知っています。

お婆ちゃんも帰り、今度はパパが帰ってきました。

今度は葉月ちゃんがいっぱい遊んでもらう番。

パパはちよつと我がまま、遊びはパパの好きな事ばかり。

「戦いごっこするぞ！」

「えゝしょうがないな。葉月はおままごとしたいんだけど、付き合
つてあげるよ。」

そついい、新聞紙で作った棒を出します。

「えい！やあ！」

二人で楽しそうに戦っていました。

「ぎゃゝ」

どうやら、葉月ちゃんの目に棒が当たってしまったようです。

「ごめんごめん。」

パパが一生懸命謝っても、葉月ちゃんは泣き止みません。

その時、お料理をしたママが、駆け寄ってきました。

「どこが痛いのか？」

ママは、葉月ちゃんの目に棒がぶつかった事、知っています。

けれど、あえて聞きました。

「あどべ、棒がごごじあだつで、ウグツ。」

葉月ちゃんの手は言葉を言っているのかわかりません。

「葉月、落ち着いて話して、なんて言ってるかわからないよ。」

「あのね、棒がごごじあだつで……。」

まだちゃんと話せません。

ママは何度も聞きます。

これは、葉月ちゃんを落ち着かせて、静かにさせる為の方法なのです。

抱きしめて、背中をポンポンと叩きながら、また同じように聞きました。

いつの間にか、葉月ちゃんは落ち着いて話します。

「あのね、パパが葉月の目を棒で叩いたの。
目が痛いよ。」

きちんと説明した後、さらに大きな声で泣きました。

「そうか、それは痛かったね。ここね。
“痛い痛い”の飛んで行け”治った?”」

何度も繰り返しておまじないを唱えます。

「まだ痛い。」

「じゃあ、冷やそうね。」

いつの間にか、葉月ちゃんは泣き止んでいました。

ママは、おしぼりを取りに行き、お人形も連れてきます。

「はい。お人形さんも、葉月の声を聞いて心配だつて言つてたから連れてきた。

『僕、魔法をかけてあげるよ！ママより強い魔法が使えるんだ。』
つて言つてゐるわ。

おしぼりを目に当てながら、お人形さんにも魔法をかけてもらいましょう。」

葉月ちゃんと言われた通りにします。

「治つてきた！ホントだ！」

いつの間にか笑顔です。

その時、赤ちゃんがまた泣きだします。

ママは慌てて赤ちゃんの元へ行きました。

パパは何も手伝わないのに、文句だけ言います。

「おい、まだ泣きやまないのか？」

「今、オムツにおっぱい終わったから、眠くて泣いてるんだと思う。
ちよつと待ってて。」

ママはそう言いながらいろいろ試します。

洋服を着替えさせてみたり、抱っこしたり、背中をさすったりしました。

やっと赤ちゃんも落ち着き眠ったよう。

抱っこをパパに任せ、ママはご飯作りの続きをします。

赤ちゃんも熟睡し、ベットへ移動。

みんなご飯もお風呂も済ませ、寝る時間になりました。

「おやすみなさい。」

しばらくすると、赤ちゃんが泣き出します。

ママは赤ちゃんのお世話を始めました。

いつものように、全て試してみましたが、ベットに移動させるとまた泣き出します。

「うーん。眠いよ。」

とうとう、ママは弱音を吐きました。

「だめだ……。もう眠いから一緒に寝よう。」

いつもは、赤ちゃん専用のベットで寝させていましたが、ママは一緒に寝る事にしました。

初めての事で、赤ちゃんを潰してしまわないかドキドキ。

でもママの作戦大成功！

赤ちゃんは一人で寝て、寒かったのです。

すやすや眠る赤ちゃん。

ママも一緒にすやすやです。

3時間おきに、お腹が空く赤ちゃん。
鳴き声で起こされるものの、ママと一緒に寝れば、グッスリ眠ります。

『赤ちゃんは、無意味に泣いたりしない。』

ママはそう思いました。

赤ちゃんのお世話は、すればする程得意になる。

今のママにとって、赤ちゃんより厄介なのはパパでした。

『よし！パパには葉月から手伝いするようにいつてもらおうぞ！』
ママはドンドンお勉強して、頭が良くなるのでした。

「泣いて笑って」

「泣いて笑って」

小太郎君は、暴れん坊。

おうちの中でも走り回ります。

廊下の壁だってスルスル登るのです。

「ママ見て！」

小太郎君はベランダの窓を開け、よじ登っています。

「危ないからやめなさい！」

ママの言葉もお構いなしで、どんどん登っていきます。

「ほら！すごいでしょう」

今度は、ぶら下がって見せます。

ママもあきれている様子。

その時です。

“バッターン”

小太郎君は、ベランダに落ちてしまいました。

ママが駆け寄ってきます。

「うぎゃー痛いよー。」

ママの言う事を聞かない小太郎君。
とうとうケガをしてしまいました。

「痛い痛い飛んで行け」

いくらママがおまじないをしても泣き止みません。
そうとう痛い様子。

「ママ」。足の骨が折れた。」

「どれどれ？見せて。」

ママに、痛い足を見せました。

「がああああ。本当だ。折れてる！」

ママは、大げさに叫びます。
そして小太郎君の膝を、曲げてみました。

「うはっは。違うよそれは膝だよ。」

小太郎君は、泣きながら笑って答えます。

「えー、じゃあこっち。がああああ。」

今度は、足の指を曲げながら、大声で叫びました。

また小太郎君は泣きながら笑って答えます。

「違つよ。それは足の指。ママだつて曲がるよ。」

ママは自分の足を出して曲げて見せます。

「あら、本当だ。間違えちゃった。」

そうこうしているうちに、小太郎君は痛い事も忘れ、笑っていました。

ママは、もう一度おまじないをかけ、シップを張つてあげます。

そして、小太郎君を抱っこすると優しくいいました。

「骨は折れてなかったみたい。良かったね。でも、ママのいう事聞かないと、いつか大けがしちゃうから、気を付けようね。」

「うん。今度は気を付けてやる。」

どうやら懲りない小太郎君でした。

「泣いて笑って」(後書き)

話をすり替える方法は、子供にうけます。
痛いなら、痛みを忘れるようなアクションを！

「そんな事も知らないの！」

「そんな事も知らないの！」

5才になった絵末ちゃん。

今まで自分でやっていた事を、面倒がつてやりません。

「お部屋を片付けなさい。」

「えゝ。どこに片付ければいいの？」

知らないはずがありません。

お人形置き場も、本棚も、ブロック箱も決まっています。

「わかってるでしょ！」

ママが怒って言えば言う程、絵末ちゃんはいう事を聞きません。

「えゝ知らない。教えてよ。」

「えっ！本当に知らないのおゝ。」

ママが冗談めかして言いました。

絵末ちゃんも、にやけて“知らない”と言い張ります。

「あらあら、絵末ちゃん5才じゃなかったかな？もしかして、3才さんになったかな？」

ママは、絵末ちゃんを抱っこして赤ちゃんごっこを始めました。

絵末ちゃんも何だか嬉しそう。

「じゃあママが、ひとつづつ教えてあげるから、やってみようか。」

「うん！」

こうして片付け開始です。

まずは大きな物から指差します。

「お人形さんは、背の順にこの棚に並べて。」

ほら、お人形さんが“僕から片付けて”って言っているわよ。」

「うん。聞こえる！じゃあお馬さんからね。」

絵末ちゃん、片付けも楽しく出来ています。

「えー、次はウサコちゃん？じゃあ、こっちに行こうね。」

独り言を言いながら、お人形の片付けを終わらせました。

「ママ、次は？」

次は、お絵かき帳と本。

その次はブロック。

あらあら、色エンピツたちも転がっています。

「よし、最後だね。じゃあ、ママと片付け競争だ。エンピツをたくさん集めた人が勝ち！」

絵末ちゃんは急いでエンピツをかき集めます。

ママは、なかなか拾えません。

「絵未は十八本だよ。ママ三本だけじゃん。」

「あゝあ。ママ、負けちゃった。」

負けたママもニツコリ笑って喜んでいきます。

お部屋もキレイになって、お部屋まで喜んでる。

絵未ちゃんも、これで“片付け方法”思い出せたかな？

「そんな事も知らないの！」（後書き）

大人が怒っている時ほど、子供も同じ反応をしてきます。
一度大人は深呼吸。相手は子供という事を忘れずに！

「おもちゃの取り合い」

「おもちゃの取り合い」

「これ、僕のだよ。」

「ちょっと貸してよ。」

かえで君と誠司君が、おもちゃの取り合いをしています。

「かえで、ちょっと貸してあげなさい。」

かえで君のママが怒っています。

誠司君はそれを聞いて、自分のママの顔を見ました。
誠司君のママは、じっと様子を見ているだけです。

するとまた、おもちゃの取り合いが始まりました。

「やだ。まだ僕が遊ぶんだもん。」

「ダメだよ。かえで君のママだって、貸してあげなって言ってるじゃん。」

すると、かえで君のママがおもちゃを取り上げようとしてきました。
誠司君に貸してあげるつもりです。

「あら？みんなちょっと待って。」

様子を見ていた誠司君のママ。

「ちょっと、静かにして耳を澄ませてみて。」

かえで君と誠司君は、おもちゃを手に掴みながら、耳を澄ませます。

「ほら、おもちゃの声が聞こえて来た。」

「えー聞こえないよ。」

「うん。僕も。」

かえで君のママは、その様子を静かに見守っています。

「そうか、まだ子供だから聞こえないのかな？誠司君ママには聞こえるよ。」

「何て言ってる？」

かえで君と誠司君が同時に言います。

「『ケンカしないで。ケンカするなら僕、おもちゃ屋さんに帰りたいくなっちゃう。仲良くする方法考えてよ。』って言ってるわよ。」

かえで君と誠司君は見つめ合って考えます。

「じゃあ、貸してあげる。僕はおうちでいっぱい遊べるから。」

かえで君は、おもちゃから手を離して誠司君に貸してあげました。

「ありがとう。ママ、おもちゃさん何て言ってる？」

「『ありがとう。僕たちは、みんなと仲良く遊ぶ為に生まれたんだ。これからもケンカしないでね。』って言ってるわよ。」

誠司君のママは、そう答えるとかえで君のママを見てニッコリ。

かえで君のママもニッコリしています。

誠司君も、今度はかえで君と一緒におもちゃで遊び始めます。
どうやら、良い方法を考え出せたようですね

「おもちゃの取り合い」（後書き）

この手は、いろいろ応用できます。大人は人形やおもちゃ等の声が聞こえると思いきませ、モノの方から注意してもらうのです！小学生でも、信じている子がたくさんいますよ（*^|^*）

「お人形が壊れた」

「お人形が壊れた」

ラブちゃんには、産まれた時からのお友達があります。

その子の名前はピンピン。

ピンク色で、大きなアルパカの人形。

ラブちゃん、5才の誕生パーティーの日の事。

大好きなピンピンと一緒にケーキを食べていました。

手に持っている、ホークを振り回していたら、
ピンピンのお鼻にぶつかってしまったのです。

ピンピンのお鼻は、チョコレートケーキで茶色く汚れてしまいました。
た。

ラブちゃんは、急いで拭きます。

もっとチョコが広がって、汚くなってしまいました。

ラブちゃんの目は涙でいっぱい。

「ママあ……。」

とうとうママに助けを求めます。

ママは“しみ抜き”を持ってきて、ピンピンの顔をキレイにしてくれます。

その様子をみていたラブちゃんは、自分でやると言い出しママと交

代しました。

「ピンピン、ごめんね。」

「『うん。僕は大丈夫だよ。ちょっとくらい汚れたって気にしないもん』っていつてるわ。」

ママがピンピンの言葉を通訳します。

ラブちゃんは、一生懸命ママと同じようにピンピンのお鼻を拭きますが、まだまだキレイになりません。

“ゴシゴシ。ゴシゴシ”

ちよつと強めに拭いてみました。

“ぶちっ”

あら大変。

お鼻と、お口の糸が切れてしまいました。

「うぎゃ〜。ピンピンごめんねえ〜。」

せつかくの誕生パーティーが台無し。

ラブちゃんは大泣きです。

「『大丈夫だよ。僕全然痛くないよ。一生懸命キレイにしてくれるラブちゃん、僕大好き。キレイになったら、今度は僕のお鼻とお口、ラブちゃんが書いてよ。』って言ってるわよ。」

「本当?」

ラブちゃんは、涙を拭きながらピンピンのお鼻の掃除を続けました。

やっとキレイになり、今度はマジックを用意。

ラブちゃんは、すぐにピンピンのお顔を完成させました。

「ピンピン何て言ってる？」

「『ありがとう、ラブちゃん。大好きだよ。』っていつているわよ。」

それを聞いたラブちゃんは、ピンピンを抱きしめます。

「私もピンピン大好き！ごめんね。」

「『ラブちゃん、気にしないで！僕が壊れるのは、ラブちゃんが僕といっぱい遊んでくれてる証拠なんだ。だから、僕は嬉しいよ』っていつてる。」

それを聞いたラブちゃんには、笑顔が戻っていました。

さあ、誕生パーティーの再開です。

素敵な思い出が作れそうですね。

「お人形が壊れた」（後書き）

子供はお人形にも気持ちがあると信じると、とても大切にしてくれます。

兄弟姉妹がいない子供でも、人形との関係で繋がりを学んでくれるといいですね♪

ちなみに、子供は学習していくと本当に大人が人形の声を聴けているか、確認しようと思います。

内緒話を始めたら『くすぐったいよぉ〜近すぎだよ〜』と言って、子供の言葉がちゃんと聞こえるようにさせるといいですよ（*^_^）

「子供嫌いだったの？」

「子供嫌いだったの？」

「ママこれ書いて。」

そう手紙を渡した凜君。

その手紙は保育園からの宿題です。

0才から保育園に入っていた凜君。
今年は卒園。

その卒園式に両親から手紙を送る事になりました。
ママは手紙を見て考えています。

0～6才までの親の気持ちを、1年毎に書いて下さいと記されています。

ママは早速、紙を広げ書き始めました。

0才

産まれた時は未熟児で入院し、とても心配でした。

凜が生まれる前は、子供が嫌いでお世話出来るか心配でしたが、毎日泣き顔を見るたびかわいいと思い、子供好きになりました。

1才

歩けるようになると、注意も聞かずケガばかりで救急車にも乗るく

らい。

毎日ハラハラドキドキでした。

2才

活発な子で、走ってはケガ。手術した事もあるくらい。「死なないで。」と毎日祈ってました。

3才

この頃やっと、転んでも手が出せるようになり、安心して遊ばせる事が出来るようになりました。

ママの手が止まったのを見て、凜君が聞きます。

「何て書いてるの？」

そう言われママが読み上げました。

「えっ？ママって子供嫌いだったんだ？」

凜君は不思議そうに聞いてきます。

「うん。凜以外は、今でもあまり好きじゃないわよ。でも、凜より小さな子を見ると、凜の赤ちゃんの事を思い出して、かわいいって思う事もあるかな。」

「何で凜の事は好きなの？」

「そうね、理由はママにもわからない。だって、凜が悪い子しても良い子でも好きだし、泣いても笑っても好きなんだもん。」

さらに凜君は不思議そうな顔をしています。

「赤ちゃんってね、体全部使って『大事にして』って言うのよ。それを見ながら、ママはいつも“かわいいね”って言う様にしたの。凜に聞こえているかなって思いながら。」

ママは凜君を抱き寄せて、頭を撫でながら続けます。

「パパはね、お仕事が忙しくて凜とあまり遊べなかったら、もっともつと凜と遊んでもらえるように“かわいいでしょ”って、抱っこさせたり、お風呂に入れてもらったりしたの。」

そうやっているうちに、パパも凜の事が大好きになったのよ。

パパは、自分で赤ちゃん産めないから、パパになったって自覚があまりなかったみたい。

ママも、帝王切開って言って、お腹切って凜を産んだから、あまり産んだっていう実感がなかったの。

突然、親になってすぐに子供好きになるわけじゃなくて、大事に大

事に育てる事で、自分の子供を愛していくんだと思うわ。」

ママは、赤ちゃんの頃を思い出しながら、話していました。

凜君も久しぶりの抱っこで嬉しそうです。

「僕、ママの子供に生まれて良かったよ。」

ママは、凜君を“ギュッ”と抱きしめ頬にキスをしました。

「子供嫌いだったの？」（後書き）

人間、簡単に暗示にかかるもの。

子供を好きと思えないなら毎日「好き」「かわいい」そう言い続ける事で自然と愛しています。

旦那さんにも聞かせ続け、子供が話し出したら「パパ大好き」と言わせて父性を引出しましょう（＾－＾）

「姉妹仲良く」

「姉妹仲良く」

「いいな。珠ちゃんのところって、姉妹仲良しだね。」

「え。七海ちゃんところは仲悪いの？」

珠ちゃんには妹、礼ちゃんがあります。

二人はとても仲良し。

でも、七海ちゃんはお姉ちゃんと仲良くありません。
いつも喧嘩ばかりで、お互い嫌いだと言っています。

うちに帰った珠ちゃんは、ママにその話をしました。

「本当に二人は仲良しで、ママも羨ましいくらいよ。ママも仲間に入れてよ。」

それを聞いた珠ちゃんと礼ちゃん。

「いやだよ。ママは大人だもん。」

「ね。おねえちゃん。」

二人は顔を見合わせてニコニコします。

「こう、ママも仲間に入れるんだ！」

ママは珠ちゃん達を追いかけます。

“きやつきや”

二人は大声で笑いながら逃げました。

「はあ、疲れた。ママは降参だ。」

そう言うと、ママはお料理をしにキッチンへ行きます。

「ママ。仲間に入れてあげるから、おままごしよう。」

「あら残念。ママは、もうお料理しなきゃいけないから、二人で遊んでくれる？あと、お人形さんも仲間に入れてって言ってるわよ。」

こうして二人で遊ぶことになりました。

「もう、だめだよ。」

「お姉ちゃんだって、ずるい。」

しばらくすると、ケンカが始まりました。

ママは様子を見にいきます。

「どうしたの？」

「お姉ちゃんがね、礼に赤ちゃんやりなさいって言うの。礼はいつも赤ちゃんだから、お母さんやりたいのに。」

「だってね、礼にお母さんなんて似合わないのにやるって言うんだ

もん。私がやった方が上手なのに。」

「お姉ちゃんばかりずるい。礼だってお母さんやりたいもん。」

二人の言い分は尽きません。

「そうね、どうしたらいいと思う？」

「礼がお母さんやって、お姉ちゃんは違うのにするの。」

「やだ。じゃあ、お母さんなしにする。」

二人の話し合いだけでは、解決しなさそう。

「そうね、じゃあ二人でお母さんしたらどうかかな？」

お母さんのアイデアに、二人は同時に答えました。

「やだもん。」

「じゃあ、お母さんは旅行に行つて、二人のお姉さんっていうのはどう？」

今度は、二人とも賛成の様子。

「あつ、じゃあ礼は中学生のお姉さん。」

「じゃあ、私は高校生ね。」

二人は顔を見合わせニッコリです。

ママも二人の様子を見て、ニッコリ。

キッチンへと戻って行きました。

キッチンには、二人の楽しそうな声が聞こえます。

「今日はお母さん旅行だから、二人でお料理するわよ。礼、買い物行ってきた。」

「はい。今日はカレーで良いよね。行ってきます。」

「あつ、ついでにポチの散歩もお願いね。」

二人はいつものようにすっかり仲良くなりました。

「姉妹仲良く」（後書き）

子供同士のつながりを強くするためには、親が敵になってあげる必要があります。

ケンカをしたら、二人で「どうすればいいか」考えさせるようにしましょう。

そして、いくつか提案してあげる。

考えさせる事で、ケンカになった理由も忘れていきます。

お母さんも、姉妹仲良くしてくれれば大助かりですよ（＾－＾）

「一人っ子じゃないもん」

「一人っ子じゃないもん」

「ねえ、愛子。竜司、一人っ子じゃかわいそうだから、もう一人くらい子供産んだら？」

そう言ったのはお婆ちゃん。

「こればかりは神のみぞ知るで、出来ないものは仕方ないでしょ。」

竜司君は、おもちゃで遊びながら二人の会話を聞いていました。

ウルトラマンや、恐竜。

たくさんのおもちゃで戦いごっこをしています。

『僕、一人っ子でもいいのに。』

竜司君は、お婆ちゃんが家に来る度同じことを言うので、少し“プンブン”していました。

「だってね、一人っ子だと我がままだし、兄弟がいないと寂しいものよ。」

「もう、いい加減にしてよ。竜司のどこが我がままなの？そんな古い考え止めてよ。」

ママもお婆ちゃんの小言には、飽き飽きした様子。

『僕、我がままなの？』

竜司君は遊びながらも考えています。

『いや、僕は我がままなんかじゃない。お友達にも優しく出来るし、ママを困らせるような事もあまり言わないもん。』

竜司君なりに考えています。

「ね、ウルトラマン。」

竜司君は、ついついウルトラマンに話しかけてしまいました。心の中で考えていた気持ちが声に出してしまったのです。

それに気が付いた二人。
困った顔をしています。

「竜司は一人っ子なんかじゃないわよ。だって、ウルトラマンや恐竜がいるし、ちゃんと世話もしてるのよ。我がままになるかどうかなんて、一人っ子だからとか関係ないわよ。」

竜司のお友達でも、兄弟がいるのに我がままな子供なんて山ほどいるわよ。」

「まあそうだけど……。」

お婆ちゃんは、納得いかないような顔をしていましたが、竜司君の様子をみながら、答えました。

『そっか、お人形を弟にすればいいんだ。確かに、赤ちゃんは自分の事出来ないし、お人形と一緒に。今日から、僕はお兄ちゃん！片付けだってお兄ちゃんがしてやるからな。』

竜司君は心の中で弟たちに話しかけます。

これで竜司君、一人っ子ではなくなりました。

「勉強大好き」

「勉強大好き」

弓ちゃんは3才。

ひらがな、英語、足し算、それと少しの漢字が読めるのです。

「弓ちゃん、すごい。」

そう言ったのは近所の2年生。

なぜ弓ちゃんは、こんなに勉強出来るのか？

初めて覚えた勉強はひらがな。

ママが本屋さんで買ってくれたものでした。

お絵かきが大好きな弓ちゃんに、ひらがなドリルをプレゼントしたのです。

それから、弓ちゃんは勉強が大好き。

本屋さんに行つてはねだります。

ママもお勉強の本は、たくさん買ってくれました。

でも、弓ちゃんはほとんどのドリルを1日で終わらせます。

あまりに早く終わらせてしまうので、今度はインターネットを使って勉強させる事にしました。

子供用の勉強ページを開き、弓ちゃんにパソコンの使い方まで教えます。

その時です。

ママが良いものを見つけました。

それは、お勉強ドリルをプリントできる所。

ママが、弓ちゃんと一緒にパソコンを見ていられない時は、プリントしたお勉強をするのです。

しばらくは、飽きずに続けていたお勉強。

でも、とうとう弓ちゃんが飽きてしまった事がありました。

「よし！じゃあお勉強に行こう。」

そう誘ったママが連れて行った場所。

そこはカラオケ屋さんでした。

弓ちゃんは大好きな歌を1時間、思いつきり歌います。
読めない漢字が出てくるお歌もありました。

そんな時は、ママがすかさず教えます。

いっぱい歌えてお勉強！

弓ちゃんは大満足です。

「このお歌覚えたい。」

そう思った弓ちゃんは、覚えた歌から今度は漢字まで憶えて行きました。

足し算だつて簡単。

幼稚園に行くまでの道のり。
ママが質問を出します。

「1たす1は何だ。」

「2！」

だんだん難しい問題になっていきます。

「8たす2は何だ？」

「えつと……。」

弓ちゃんが考え始めると、ママはヒントをくれます。

「おうちにお菓子が8個ありました。2個かってきたらいくつになりますか。」

しばらく考えて、指を使って計算です。

「10個！」

こんな事を続けているうちに、いつの間にか指を使わなくても、引き算まで出来るようになりました。

幼稚園では、絵本担当の弓ちゃん。
お友達に読んで聞かせてあげます。

聞かせてあげる事がうれしくて、どんどん本も好きになりました。

幼稚園にある本で、弓ちゃんが呼んだ事のない本はありません。

そんな弓ちゃんを見て、お友達もお手紙を書いたり、勉強を始めます。

先生気分の弓ちゃんは、今日も楽しくお勉強をしています。

「勉強大好き」（後書き）

こんな事まだ早い。そう思うのは大人だけ。子供の吸収はとても早いもの。

遊びに勉強を取り入れる事で、勉強も大好きになっていきます。

3歳くらいのお子さんをお持ちのお母さん。高い教材買わなくても、おうちの中にはたくさん勉強道具が転がっていますよ（＾－＾）

「どっちなら出来る？」

「どっちなら出来る？」

今日は日曜日。

和樹君は朝ごはんを食べ、寝てしまいました。
ママは怒っています。

「和樹、宿題するか遊びにいくかどっちかにしなさい。」

「えーどっちもやだ。眠いんだもん。」

この頃の和樹君は、お休みになると寝てばかりです。
宿題も夜遅くなってから始めるので、寝る時間も遅くなります。
そしてよく朝は寝坊。

今日のママは、いつもとちょっと違います。
和樹君のお布団をはぎ、ベランダに干してしまいました。
これでは和樹君も寝れません。

仕方なしに、リビングへと向かいます。

付きっぱなしのテレビを見て、ボーとしてる。

「和樹、宿題はいくつ出ているの？」

「音読と、算数と、漢字の書き取り。」

「よし、じゃあ、3つの内ひとつだけ選んで今やりなさい。」

お母さんはひとつだけやれば、後は好きにして良いといいました。
和樹君も少しやる気が出ます。

「じゃあ、漢字にする。」

和樹君は、自分の部屋から漢字のノートを持ってきました。

リビングでやるつもりのように。

ママはキッチンから、その様子を眺めています。

「はい！おゝわった。」

漢字の書き取りは得意のよう、すぐに宿題を終わらせ、その場に寝そべってしまいました。

「どれどれ。」

ママが漢字のノートを見ます。

「あら、和樹。和樹ってこんなに字、上手だったわけ？すごくキレイに書けてるわね。」

ママが褒めたので、和樹君は嬉しそう。

「ちょっと算数のノートも見せてよ！」

ママがお願いすると、和樹君は急いで算数のノートを取りに行きました。

「はい。」

「どれどれ。あらうやっぱり、数字もうまいのね。計算も結構出来るじゃない。算数の才能があるのかな？」

ママがそう言うと、和樹君は得意気になって算数の宿題も始めます。

「すごい！和樹。計算も早いんだね。ママが和樹くらいの時は、全然計算遅くて大変だったのよ。もっとたくさん勉強すれば、学校一番になっちゃうかもね。」

「こんなの簡単すぎて、やる気にならなかったただけだもん。俺、もっと難しいのやりたいんだよね。」

そう言いながら、算数の宿題も終わらせてしまいました。

「和樹、あと音読だけだし、やっちゃったら？ママも、和樹が読むの聞くの好きだから聞かせて欲しいな。」

「しょうがないな。」

和樹君は、音読まで終わらせてしまいました。

“プルル プルル”

その時、和樹君のお友達から電話です。それは遊びのお誘い。

和樹君は急いで着替えて出かけます。

「行つてきます。」

どうやら、ママの作戦勝ちのようですね。

実はママ、メールを使って和樹君のお友達にこっそり連絡していたのです。

【メール文】

和樹に、外で遊んでもらいたいから、暇なら要君と学校で遊ばせない？

要君がOKだったら、自宅に電話下さいな。

【終わり】

宿題もすっかり終わって、外で遊べた和樹君。

今日は早く寝れそう。

「どっちなら出来る？」（後書き）

子供は調子に乗せましょう。うまく操るのは親の腕の見せ所です♪

〔朝は苦手〕

〔朝は苦手〕

南ちゃんは朝が苦手です。

3才になって、幼稚園に行くのがもう大変。

ママが無理やり起こすなら、泣いて拒絶。

余計に時間がかかって困る事に……。

次の作戦はマンガです。

南ちゃんのお部屋に聞こえるよう、大きな音にしてみます。

最初はその作戦に乗っていた南ちゃん。

次第に、マンガの音でも起きなくなってしまうました。

次の作戦はめざまし時計。

南ちゃん専用の時計を買いました。

でも全然効果はありません。

最初はすぐに音を止め、2度寝していたのに、

今ではめざましすら、セットするのを止めました。

次の作戦はお人形。

このお人形からは声が出ます。

起きる時間も教えてくれ、お腹が空いただの、遊んでくれだの言うのです。

最初は、一生懸命お世話した南ちゃん。
4日もすると、お人形に怒りだしました。

「もう！南は眠いの。お世話してあげない。」

とうとうこれも失敗です。

次の作戦はチョコレート。

ママがテレビで見た話し。

芸能人が朝起きて、一番最初にチョコを食べると言っていました。

『これなら南に効くかも！』

そう思ってチョコ作戦開始です。

「ママが『起きなさい』って言って、すぐに起きられたらチョコ食べ
ていいわよ。」

次の日ママは、ドキドキしながら試します。

「起きなさい。」

チョコレートは、キッチンのお菓子棚に置いてあります。
自分で取りに行って食べる約束なのです。

南ちゃんは今までにない程の勢いで起き、チョコレートを口に入
れました。

「うん！目がパツチリになった。チヨコは良い方法だね。」

南ちゃんもママもニッコリ。

このあと1年間、この方法で起きられました。

でも今では、自分で取りに行きません。

起きない南ちゃんの口まで、ママがチヨコを運びます。

「ほら、おめざよ。」

「あゝん。」

“もぐもぐ”

やっと目が覚めました。

チヨコ作戦は3年間続いています。

でもいつか、また違う作戦を考える事になるのかな？

〔朝は苦手〕（後書き）

朝は戦争！限られた時間をどうするか。毎日ママの戦いですね（ハ
ー）

うちの“おめざ”作戦は、今でも有効。

小学生になった時は、おめざがなくても自分できちんと起きて支度も自分で済ませるようになりましたよ。

「歯みがきだ！急げ」

「歯みがきだ！急げ」

風太君はおもちゃで遊んでいます。

「歯みがきするわよ。」

ママの声も聞いていません。

聞いていなくとも、ママはお構いなし。

さっさと自分の歯みがきを終え、ベットに入ります。

それに気付いた風太君。

「あゝ。ママずるい。いつの間に歯みがきしたの？ちゃんと言ってよ。」

プンプン怒っている風太君。

「知らないわよ。ママはいつも言っているでしょ？ママにやってもらいたいなら、自分がママの声を聞くように気を付けなさい。」

風太君は口を尖らせています。

「やってよ。僕が虫歯になってもいいの？」

「じゃあ、明日は気を付けてね。風太が虫歯になって、痛い思い、恥ずかしい思いするのは風太だし、ママは一度声かけたから。」

風太君のうちでは、人にやってもらう事に文句を言っではいけません。

文句を言うなら、自分でやらなくてはいけないのです。

風太君は今回諦めて、自分で歯みがきをしました。

翌朝風太君は、無事ママに歯みがきをしてもらい、すっきりして幼稚園に行きます。

幼稚園から帰って、自分で次の日のお支度をしていた時の事です。

「ママ。お支度したから確認して。」

風太君は隣の部屋からママを呼んでいます。

「風太、聞きたい事があるなら自分でこっちに来なさい。」

ママは昔から風太君に言っています。

「ママが小さい頃、自分のお母さんに何でもやってもらったの。だから大人になって、とっても恥ずかしい思いをしたのよ。」

会社に入って、自分より偉い人に

『すいません。ちょっといいですか？』

って、ママの方に来てくれるように言ったの。

そうしたら『目上の人を呼び付けるな』ってすごく怒られたの。だから風太に恥ずかしい思いをさせないように、今から練習させているのよ。」

ついつい忘れていた風太君。急いでママのところにやってきまし

た。

「お願いします。」

両手を添え、幼稚園かばんを差し出します。

今日も立派な大人になる為の、練習を頑張つてこなす風太君でした。

「上履きなんて洗うの簡単」

「上履きなんて洗うの簡単」

今日は土曜日。

幼稚園に入ってから、初めてのお休みです。

「レイラ、こっちおいで。」

「はい。」

ママは、レイラちゃんを手洗い場へ呼びました。どうやら上履きを洗うつもりです。

「いい？まず上履きの汚れを、たわしで落とすのよ。」

レイラちゃんは真剣に見ています。

ママはレイラちゃんの手を持って、優しく教えます。

レイラちゃんも楽しそう。

お水を溜めて、洗剤つけて洗います。

「レイラ自分で出来る。」

ママはレイラちゃんの様子を見守ります。

“バシャバシャ”

“ビチャビチャ”

レイラちゃんは、あちらこちらに水を撒き散らし、手洗い場は水

浸し。

それでも、ママはニコリしながらレイラちゃんを見つめています。

「終わった！」

「良く出来ました！じゃあ、ママがピツカリチェックするね。」

ママは残った汚れを、レイラちゃんに教えながらキレイにしました。

レイラちゃんも真剣に見つめます。

「ほら！ピカピカになったよ。」

レイラちゃんも嬉しそう。

手洗い場まわりもキレイに吹いて、今度は上履きを乾かします。

「レイラ、今度はベランダに行くわよ。」

ママに言われ、上履きをバケツに入れて運びます。そのまま上履きをベランダに置いたら注意されました。

「上履きはね、こうしてお水が落ちるように、斜めに傾けて置くの。」

「これでいい？」

すっかり自分のお仕事をしたレイラちゃん。
これでまた、立派になりました。

「上履きなんて洗うの簡単」(後書き)

小さいうちからお手伝いをさせるのは、親の手を煩わせないためにとっても必要です。

子供も楽しく出来るうちに、自分の事をするのは当たり前という考えを植え付けましょう。

「我慢できないよ」

「我慢できないよ」

「ママ抱っこして。」

「ごめんね亮君、ママお料理しているからあとでね。」

ママの手は、お水でびしょ濡れです。

でも亮君はいう事も聞かず、ママにしがみ付きます。

「こら！危ないでしょ。包丁使っているんだから、止めなさい。」

とつとつ怒られますが、それでも諦めません。

「やだやだ！抱っこ。」

ママもあきれ顔、そこでママは交換条件を出しました。

「じゃあ、亮がひとつ言う事聞いてくれたら、抱っこしてあげる。」

ママはそう言うつと、見ていないテレビを消してくるように言いました。

亮君は走ってテレビを消しに行きます。

「ママ、テレビ消したよ。」

「しょうがないわね、じゃあ一度だけよ。」

そう言つて、ママは亮君を抱っこしてあげました。

亮君は、抱っこされたからには離れまいと、しがみ付きました。

「一回って言ったでしょ。」

ママはそう言って、お料理を始めてしまいました。

「じゃあ、もう一回いう事聞いたら抱っこしてくれる?」

「そうね、もっといっぱい言う事聞いてくれたら、いっぱい抱っこしてあげる。」

ママは次々とお願い事をします。

亮君もママに言われ、片付けを始めました。

「ママ、次は?」

「これも?」

「終わったよ。次!」

そうこうしているうち、ママもお料理が終わりました。

「よし!たくさんお手伝いしてくれたから、抱っこしてあげるよ。」

「

亮君は、走ってママに抱きつきました。

ママも抱っこが大好き。

でもお仕事中は出来ません。やっとお料理も終わり、思いっきり抱っこです。

「やだあ。くすぐりたいよ。」

「ママに抱っこされたら、何されても文句言えないのだあ。」

二人はじゃれ合って楽しんでいました。

とうとう、くすぐり攻撃に観念した亮君は逃げ出します。

「待てえ〜。」

「や〜だよ。」

“きやつきゃ”

今日も楽しい一日でした。

「我慢できないよ」（後書き）

わがまま言うのは子供の特権。でも相手をしてあげる時間がない時の対応。

それは一回やったら一回何かしてもらう。子供にそれは酷なんでしょう？という考えもあるでしょう。けれど社会に出れば持ちつ持たれつ。無償で何かをしてもらうのは難しいです。

それを小さいうちから教える事で、自分も子育てが楽になり子供も順調に成長できるのです。

「ご飯食べるの面倒くさい」

「ご飯食べるの面倒くさい」

鈴ちゃんは、ご飯を食べるのがとっても苦手です。

でも鈴ちゃんは、ママのいう事を聞いて、しっかり嚙んで食べているだけなのです。

「もう！鈴、早く呑み込みなさい！」

「だって、口に入ってるもん。」

鈴ちゃんの小さな抵抗もむなしく、ママはドンドンご飯を口の中に入れます。

だんだん鈴ちゃんは、ご飯を食べるのが嫌になって来ました。

ある日の登園の事、ママはお友達に食事の話を相談します。

「うちの子、食べるの遅くて困るのよ。」

「別に気にしなくて大丈夫よ。小学生になれば、自然と早くなるから。逆にしっかり食べているなら、遅刻も気にせず見守ったら？」

そう言われても、ママは納得いきません。

ママにもお仕事があります。仕事に行く時間を考えて食べきって欲しいのです。

「それなら、朝は食べやすいコーンフ레이크とかにしてあげたら？まず食べきる喜びを教えるから、徐々に普通のご飯に移行するといいわよ。」

そのアドバイスを元に試していききました。

コーンフ레이크はもちろん、パンや肉まん、おにぎりなど、きちんと栄養が摂れているか心配です。

そこでまた、お友達に相談します。

「そんなの気にする事ないわよ。今は練習として行っている事だし、お昼は給食、夜はしっかり食べるんだから、神経質にならない方がいいわよ。」

そういわれ、ママも少しホッとしています。

けれどお婆ちゃんに怒られました。

「コーンフ레이크なんて、母親が手抜きしてるだけでしょう!」

ママは、自分が間違っているのかと落ち込みました。

「そんな事気にしないの!子供の母親は自分なんだから。子供の世話をしているのは自分なのよ。やってない人の言葉なんて気にしないの!」

ママのお友達が勇気つけてくれます。

簡単な食事を続けるうち、鈴ちゃんは早く食べられるようになっていきました。

もちろん、鈴ちゃん用に量も合わせて減らします。

しかし、ある日の事。

鈴ちゃんは、食事中に遊び出すようになってしまいました。ママがいくら早く食べるように言っても聞きません。

「鈴、どうして早く食べてくれないの？」

「だってめんどくさいんだもん。」

そう言われ、ママは考えました。

「じゃあ、一回ママが食べさせてあげるから後は自分食べるのよ。」

ひと口手伝ってあげると、お腹もすいた様で食べ始めます。時々遊んでも、ママが『食べてる？』と声を掛けると慌てて口に入れます。

この作戦は大成功のよう。

お友達にも報告し、とても喜んでくれます。

「でもね、だんだん知恵が付くと、見てないところで遊んだりするから、そういう時はおもちゃを取り上げたり、声をかけるの。そうすると、頑張って食べるわよ。」

ママが子育てをつまくなるように、子供も日々育っているようです。

これからは知恵比べ大会になりそうですね。

「お皿が割れた」

「お皿が割れた」

「僕がお皿洗う！」

四才の鉄也君は、お姉ちゃんのマネをしてお皿を洗いたがります。

「鉄也が出来るわけないじゃん。」

「出来るから。」

いつも、六才のお姉ちゃんが洗っているお皿を、今日は鉄也君が洗う事になりました。

「じゃあ、お願いね。」

ママはそう言うと、鉄也君が流し台に届くよう、イスを用意してリビングに戻ってしまいます。

鉄也君、やる気満々。

「よし！いつもママがやってるのは、コップからだな。」

鉄也君は、きちんとママの洗う順番を見えています。

スポンジに洗剤を付け、ふわふわの泡。

落とさないように、しっかり持ってゴシゴシ洗います。

「よし！次。次、次……。」

だんだん慣れてきた鉄也君。
大きな平たいお皿を洗っている時でした。

“ガッシャン”

大きな音を聞き、ママもお姉ちゃんも飛んできます。

「きゃあ。大丈夫？鉄也。」

「ごめんなさい。」

鉄也君は半泣き状態で謝ります。

「それより、ケガしてないの？」

ママは鉄也君の手を取り、ケガがないか確かめます。

「あゝよかった。ケガはないわね。」

「ね、だからお姉ちゃんが言っただじゃん。」

鉄也君は泣き出してしまいました。

「だって、重かったんだもん。」

ママは鉄也君の手を洗いながら言います。

「いいのよ。お皿なんてまた買えばいいんだから。ママだって、お皿割る事あるわよ。それより、ケガがなくてよかったわ。ありが

とうね。練習練習！」

鉄也君は、洗った手を拭いてもらいながら言います。

「そうだよね。だってケガは痛いけど、お皿はまた買えばいいもんね。ママは、僕がケガする事の方が、悲しいんだもんね。」

やっと鉄也君、笑顔になりました。

ママもニコリと笑って、鉄也君の頭を撫でます。

割れたお皿の片付けは、もちろんママ。でも、鉄也君だって手伝います。

「はい。ゴミ袋。ママもケガしないでね。」

「ありがとう。鉄也は本当にいい子ね。」

初めてのお皿洗い。

失敗はしたけれど、大満足の鉄也君でした。

「お皿が割れた」(後書き)

お手伝いの失敗は、責めてはいけません。ママだって失敗する事があります。

長い目で見守って、喜びを教える事で子供も楽しくお手伝いができるようになるのです。

「お化けなんて怖くない」

「お化けなんて怖くない」

「ねえ、ママが一番怖いのは何？」

「ママが怖いのはね、悪い人かな。メグは？」

「どうやら恵ちゃん。」

幼稚園で絵本を読んで、お化けが怖くなったみたいです。

「ママはお化け怖くないの？」

「うん。だってお化けは“ワッ！”って脅かして、遊んでいるだけなのよ。それより、生きている人間の方が怖いわよ。」

ママは、おうちに突然ドロボウが来たら、お化けより怖いと言いました。

恵ちゃんは、それでもお化けが怖いと言います。
すると、突然ママが恵ちゃんを驚かせます。

“ワッ！”

「あゝびっくりした。」

「ね。ビックリしても痛くないでしょ？」

ママはケタケタ笑っています。

何だか恵ちゃんもつられて笑ってしまいました。

「もう！ママのバカ。」

「お化けだって、たまには遊びたいのよ。脅かされたら、今みたいに“コラッ！”って怒ればいいじゃない。」

恵ちゃんも、これでお化け退治が出来るようになれそうです。

「お化けなんて怖くない」(後書き)

少しづつ、人間への恐怖を教えるのも勉強です。

すべての人間を恐れさせるのは問題かもしれませんが。

ただ、今の世の中ママ友達が、子供を殺める事もあるのです。

それを、意識の中へ植え付ける必要もあるのではないのでしょうか？

「お風呂そうじ大好き」

「お風呂そうじ大好き」

今は真夏。

今日も、楽しいお風呂そうじは、みんなでやります。

「お風呂そうじしてくれる人！」

「はい。」

「はい、はい、はい。」

仁志君と淳史君。

二人で走ってお風呂場へ向かいます。

“ジャボン”

お風呂そうじはプールと一緒に。
お水で遊び始めます。

「こゝら。ちゃんと洗ってる？」
「洗ってるよ。」

“キャツキャ”

二人は石けんで、湯船を洗いながら水浴びをしていました。
ママも何だか嬉しそう。

かれこれ2時間。

二人のお風呂そうじはとっても長い。

「もう、いい加減に出てきなさい。」

「はい。」

二人とも残念そう。

やっと、お風呂の水を抜いて自分もシャワーを浴びました。

「見てママ。」

仁志君は手を見せます。

ずっと、お水に浸かっていたので、手はしわしわ。

「きゃっはっはっは。」

それでも嬉しそう。

お風呂そうじは、終わっても楽しみがあるのです。

「お風呂そうじ大好き」（後書き）

小さい子供のお手伝いは、遊びから始まります。
どんなに時間がかかっても、見守る事が大事。
親の我慢が、お手伝いをする子供を作り出すのです。

「食べながら宿題？」

「食べながら宿題？」

「奈々、先にご飯食べちゃいなさい。」

朝から奈々ちゃんは、宿題をしています。

「だって終わらないんだもん。」

昨日の夜、遊び疲れて寝てしまった奈々ちゃんは、半泣きです。

「しょうがないから、学校行ってから続きやったら？」

「やだ、恥ずかしいもん。」

ママはあきれ顔。

それでも、奈々ちゃんはご飯を食べず、宿題をしています。

「じゃあ、パンだけでもいいから、口に入れながら宿題やりなさい。」

「えっ！いいの？」

いつも、お行儀にうるさいママが、食べながら宿題をするように言いました。

奈々ちゃんはビックリです。

「食べながら宿題する事が、いけないってわかってるんでしょ？今

日は特別よ。」

「わーい。」

奈々ちゃんは、パンを片手に宿題を続けました。

“モグモグ、ゴックン”

“書き、書き”

「終わった！」

何とか、学校へ行く時間に間に合いました。

「今日は、帰ったらすぐ宿題やるのよ。」

「はい。」

支度も終わり、急いで学校に向かいます。

「行ってきます。」

明日は奈々ちゃん、お行儀よく食事が出来るといいね。

「食べながら宿題？」（後書き）

きちんと、しつこく覚えさせたら、たまには脱線を許すのも手です。
【ダメなものはダメ】それを理解しているなら、成長の第一歩。
ママも力まず、教育すれば子供は自然と良し悪しを判断出来るようになるものなのです。

「お風呂上りは努力が必要」

「お風呂上りは努力が必要」

「ママ。上がったよ。」

元気君は、お風呂から上がり、ママに体を拭いてもらうつもりです。

「自分で拭いたの？」

「まだ。だって、面倒なんだもん。」

元気君は、自分で拭くことが出来るのに、やろうとしません。

「じゃあ、ママ仕上げしてあげない。自分で努力しない人には、手伝ってあげないって、いつも言ってるでしょ。」

元気君は口を尖らせますが、仕方なしに吹き始めました。
その様子をママはじっと見つめています。

「はい。やったよ。」

ひと通り、体も頭も拭いた元気君は、仕上げをママに頼みます。

「よし。うん。ちゃんと拭けてるよ。」

ママは満足気に言いました。

元気君も、たくさん練習したおかげで、ちゃんと自分で、拭くこ

とが出来るようになったようです。

「お風呂上りは努力が必要」(後書き)

何かひとつでも、自分でやったら手助けをする。

その回数を減らしていくことで、自然と子供は自立していきます。

「絶対やらない!」と親が意固地になっても、子供は泣くだけ。

「じゃあ、ひとつ手伝うから、ひとは自分でやるのよ。」
「そういう事で、子供は多くの事を出来るようになるのです。」

「ごめんなさいが言えない」

「ごめんなさいが言えない」

あり紗ちゃんは、お友達を泣かせてしまいました。

風船で、お友達の頭を叩いたのです。

お友達は、悲しかったようで泣いています。

「あり紗、お友達が嫌だと思っている事をしてしまったら、悪気がなくても謝らなきゃだめですよ。」

ママは優しく言いますが、あり紗ちゃんは納得できないようです。

「だってき、風船で“ポンポン”しただけだもん。」

「自分が、面白いと思ってした事でも、お友達にとって、悲しい事だったのよ。それなら、謝らなきゃいけないよね？」

「あり紗悪くないもん！」

怒られて悲しくなったのか、あり紗ちゃんは、謝る事が出来ません。

「いいのよ。そろそろ時間だし、帰るわ。」

お友達は泣いたまま、お母さんに連れられて帰って行きました。
あり紗ちゃんはホッとして、遊びを続けています。
でもママは、さっきの出来事を、許してはいません。

「あり紗、自分が謝ってもらえなかったら、どう思う？」

そう言われても、いなくなった友達に謝る事は出来ません。

あり紗ちゃんも、意地を張って言います。

「別にいいもん。あり紗、謝ってもらえなくても気にしないから。」

その答えに、ママは怒ってしまいました。

「じゃあ、あり紗は、本当に謝らなくて良いと思っているのね。ママは、悪い事をしたら、ちゃんとあやまる子になってもらいたいよ。」

あり紗ちゃんは、ママの話を聞かない振りをしています。

「あり紗、前にママが子供の頃、謝れなくて困った話した事、覚えてるわよね。」

「知らない。」

本当は覚えていたけれど、あり紗ちゃんは知らないと答えました。

「いい？ママは、小さい頃良い子で“ごめんなさい”っていう機会がなかったの。中学生、高校生になっても、謝ることがほとんどなかった。そのせいで、大人になって本当に謝らなきゃいけない時に、恥ずかしくて謝れなかったのよ。」

ママは、ごめんなさいを、魔法の言葉だと教えます。

みんなが仲良くなるための魔法の言葉……。

それを、子供の頃から練習する事は、とても大切。

あり紗ちゃんが“ごめんなさい”を言えず、困る事にならないよう、教えたいと話します。

「だってさ、あり紗を育ててくれているのは神様なんだから、神様に謝ればいいでしょ。あり紗はもう、神様に謝ったから！」

あり紗ちゃんは、意地でも謝らないつもり。

「わかった。ママは、あり紗が立派な大人になって、幸せになれるように、教えているつもりだけど、それが解らないなら、神様に育ててもらいなさい。」

あり紗ちゃんは、言い返す事が出来ず、ママの言葉の意味を考えます。

そしてママは、話を続けました。

「あり紗が、別の大人に育ててもらいたければ、それでもいい。ただ、ママはあり紗を神様に下さいって頼んだの。だから、あり紗と一緒にいたいけど、あり紗が、ママ以外の大人を望むなら、それでもいいわよ。ママは、あり紗の幸せが一番だから、おまわりさんのところでも、どこでも行きなさい。」

あり紗ちゃんはそれを聞き、少し困ってしまいます。

「ママが、あり紗をいらないなら、別のところに行くからいいよ…」

あり紗ちゃんは、ママと一緒にいたい。
でもまだ、ちゃんと謝る気にはなれないようです。

「だってね、お友達だって、謝らないよ。」

「じゃあ、あり紗は、謝らない子を、どう思ってる？」

あり紗ちゃんには、謝らない事がいけない事だと、わかっています。

でも、謝らないお友達がいるのも本当だから、自分もそうするんだと答えました。

するとママは、なぜ、あり紗ちゃんにここまで怒るのか、話し始めました。

「あり紗、ママが公園で、お友達に注意しない事、知ってるわよね？ママは、あり紗のお母さん。あり紗が幸せになれるよう、教えるのがママの仕事。」

他の子供は、ママにとって、とても大切なわけじゃない。だから、悪い事をしていても、あまり怒る事がないのよ。」

ママは本当に、あまり怒る事ありません。これ程怒るのは、嘘をついた時と“ごめんなさい”を言わない時だけです。

あり紗ちゃんも、それはわかっています。

「あり紗が、大人になって困ってもいいと思ってたら、ママはあり紗を怒ったりしない。だって、怒って嫌われる方が、悲しいもの。」

あり紗ちゃんは、真剣に聞いています。

だんだん、涙も出てきてしまいました。

「あり紗を幸せにしたいから、注意するのよ。わかる？」

ママは、一生けんめい話しますが、あり紗ちゃんは黙って下を向いています。

「今まで一緒にいて、それが解らないなら、ママはあり紗を、幸せにする事は出来ないし、あり紗が、違う大人と一緒に生活したいなら、ママの幸せは、あり紗の幸せだから、そうしなさい。」

あり紗ちゃんは、ママがあり紗ちゃんの事を、一番大事に思っている事、知っています。

それでも、ごめんなさいが言えません。

「あり紗、自分で決めていいのよ。ママは、きちんと“ごめんなさい”が言えるようになってほしい。」

最期のチャンスよ。

ママの気持ち解って、一緒にいたいと思うなら、今、目の前に来て言ってくれる？」

もう、あり紗ちゃんの気持ちは、きまっていました。
静かにママの前に来ます。

「何で怒られたかわかる？」

「……。ごめんなさいって言わなかった。」

「そうね、じゃあ、ママに反省の気持ちを、どう伝えればいいかな？」

あり紗ちゃんは、きちんと立って言います。

「ごめんなさい。」

今まで、ごめんなさいを“ごめん”“ごめんなび”と、ふざけて言っていたあり紗ちゃんも、やっと反省したようです。

目上の人には、敬語を使い、反省している時には、反省している姿を見せる。

ママも、きちんと謝れたあり紗ちゃんを、そつと抱きしめます。

「あり紗は、ちゃんとわかっているじゃない。」

“ごめんなさい”が恥ずかしくて言えないのよね。」

抱きしめられたあり紗ちゃんは、ママの胸の中でいっぱい泣きます。素直に謝れば、こんなに怒られる事もあります。

あり紗ちゃんの、そんな気持ちをママは知っています。

ママも、あり紗ちゃんにきつく言うのは、辛いのです。

ママもいっぱい我慢して、あり紗ちゃんに教えている。

あり紗ちゃんも、これからは“ごめんなさい”が、うまく言えるようになるかな。

「ゲームやり過ぎで熱が出た！」

「ゲームやり過ぎで熱が出た！」

「もう！さっきゲーム止めなさいっていったでしょ。」

達也君は、怒られてもゲームを止めません。

「いいじゃん。テレビのだから勉強してるんだよ。」

今は、地デジのテレビになり、番組によってリモコンでゲームが出来るのです。

確かに、お勉強が出来るゲームでしたが、ママは、目が悪くならないか心配。

でも、いう事を聞かない達也くんは、呆れながらも、ご飯のお支度があるので、声を掛けるだけでした。

達也君は、ママが来ない事をいいことに、ゲームを続けていました。

やっと、ご飯を作り終えたママが達也君のところへやってきました。

「もう！まだやってるの。」

とうとう怒って、リモコンを取り上げてしまいました。
達也君はプンプン怒っています。

「いいもん。じゃあ、別のゲームやる。」

そう言っても、ママはドンドン他のゲームを片付けてしまいました。

「なんだよ！じゃあ、何して遊べばいいの。」

怒る達也君ですが、ママはお絵書きとか、プラモデルで遊ぶように言いました。

達也君は、ゲームを諦めママの言う通りにしました。

それでも、今日ゲームをした時間は三時間。

ちよつと疲れた様です。

「ご飯よ。」

ママが、テーブルにご飯を並べますが、達也君は、居眠りをしていました。

「ほら、ご飯食べて早く寝なさい。」

「うん。お腹すいた。」

達也君は、しっかりご飯を食べましたが、なぜか、顔が真っ赤。心配したママは、達也君のお熱を測ります。

「きゃあ！38度もあるわよ。」

達也君は、急に頭が痛くなってきました。

「なんか頭痛い。風邪引いたのかも……。」

「違うわよ。ゲームやりすぎたから、頭が疲れちゃって熱が出たのよ。しばらくゲームは禁止ね。」

達也君は、考えました。

『そういえば、ママの見ていないところで、昨日もいっぱいゲームしたんだ。もしかして、そのせいかも……。』

達也君は、ママのいう事を聞いて、今日はすぐに寝る事にしました。

氷まくらをして、良い子に寝ます。

ママも、とっても心配そう。

熱のせいかな、夜中に何度も目が覚めます。

「ママ、トイレ。」

「ママ、お布団熱い。」

そのたび、ママはお世話をしてくれます。

翌朝、まだ達也君が寝ているところ、ママが体温計を挟みました。

“ピピピ、ピピピ”

「ママ、終わった。」

達也君の声で、ママがやってきます。

「よかった。お熱下がったね。」

達也君は、すっかり元気になっていました。

「ママ、僕これから、ゲームあんまりやらないようにする。」

「そうね、ゲームやりすぎちゃうと、頭も疲れちゃうものね。」
「達也くん、自分でゲームをやりとすると、良くない事を学んだよう
です。」

これからは、自分で時間を考ええて、遊ぶ事が出来るかな？

「ママ、ちょっと来て」

「ママ、ちょっと来て」

アリスちゃんは今、携帯ゲーム機で遊んでいます。

パパのゲーム機ですが、パパがいない時、少しだけなら、遊ぶ許可をもらっていました。

「ママ」。ちょっと来て。」

お掃除している、ママを呼んでいます。

ママは、掃除機の音で聞こえていません。

それに気が付いたアリスちゃんは、さっきより大きな声で叫びます。

「ママ」、来てよ。」

ちょうど、掃除機が終わったママは答えました。

「なに？」

「アリス、解らないところがあるから、教えて欲しいの。」

アリスちゃんは、自分の部屋からママを呼びつけようとしています。

ママの仕事は、まだ全然終わっていません。

「アリス、用事があるなら、自分からこっちに来なさい。いい？ 教えてもらう立場の人は、教えてくれる人を呼びつけたりしたら失礼

なのよ。」

ママは、大人の決まりをアリスちゃんにいいました。

普通の時なら、ママも来て教えてくれるで、アリスちゃんは、戸惑いました。

「だって、ゲームに漢字があって読めないんだもん。早く来てよ。」

アリスちゃんは、ママが言った事をちゃんと理解出来ず、まだ来させようとしています。

そこで、ママは掃除機を置いて、アリスちゃんの部屋へ、やってきました。

「いい？アリス。ママは、忙しいの。それに、アリスが、聞きたい事があるのよね？それなら、ママのところまで来て聞きなさい。」

そういうと、せっかく部屋へ来たママは、掃除をしに、元の場所まで戻って行きました。

アリスちゃんも、ママが来たのでゲーム機を見せて、ママにわからないところを聞こうとしましたが、聞く暇もなく、ママは出て行ってしまいました。

「ママ」。部屋に来たんだから、ついでに教えてくれればいいでしょ！。」

怒ったアリスちゃんは、ママについて行き、言いました。

「良い？アリス。大人になって会社に入ったら、自分より偉い人を、呼びつける事なんて出来ないのよ。」

ママは、子供のアリスちゃんに言います。

でも、アリスちゃんは子供なので納得いきません。

「だって、まだ子供だし、ママだからいいじゃん……。」

言い訳をする、アリスちゃん。

「いい？子供は、立派な大人になる勉強を、今しているの。だから、今おうちで勉強しておかないと、立派な大人にはなれないのよ。」

そついながら、ママはお掃除の続きをしています。

アリスちゃんも、ママの気持ちかわかり、少し考えました。

「わからないところがあるので、教えてもらってもいいですか。」

すると、ママは、掃除機を止め、アリスちゃんの方へ向きます。

「良く出来たわね。じゃあ、教えてあげる。」

こうして、アリスちゃんは、ママに解らない所を教えてもらえました。

「いい？アリス。自分が、教えてもらいたい事があるなら、例え年下の子でも、自分から、聞きに行きなさい。それは、年とか関係ないからね。」

そつ言われ、ふと思いつきました。

『そう言えば、ママが保育園でのお話を、聞きたい時も、アリス

のどこまで聞きに来る。お手伝いを、頼む時もママはアリスの所まで来て頼んでた。』

いつも、何気なく行っている行動だけど、意味があるという事を知ったアリスちゃん。

こうして、大人の決まりを学んでいくのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2927r/>

童話を聞かせながら自分も子育てを学ぶシリーズ

2011年10月8日15時57分発行